

## 70 甲賀通元「古今方彙」の検討

鈴木達彦<sup>1)</sup>・遠藤次郎<sup>2)</sup>・中村輝子<sup>1)</sup>北里研究所東洋医学総合研究所<sup>2)</sup>東京理科大学薬学部

甲賀通元による『古今方彙』は、『衆方規矩』と並んで、江戸時代のベストセラーとして知られる処方集である。今日一般に見られる版本は『重訂古今方彙』であり、延享二年（一七四五）に初版、それ以後、延享四年、安永九年（一七八〇）、文化五年（一八〇八）、文久二年（一八六二）に重版された。本書は著名な処方集であるにもかかわらず、疑問点も多い。たとえば、原『古今方彙』は今日では不明である。また、甲賀通元は著者であるのか、重訂本の編纂者であるのか、はつきりしない。

演者らは本書を検討する過程で、重訂本以前の同じ系統の版本『刪補古今方彙』を見出し、これによって『古今方彙』に関するいくつかの問題点を解決すること

ができた。また、すでに検討した『衆方規矩』との若干の比較もできたので報告する。

『刪補古今方彙』は重訂本が出版される一二年前、享保一八年（一七三三）に、望月三英の序、および甲賀通元の識語（『刪補古今方彙小引』が附されて出版された（外題は『方意』）。本書の基本的な構成は重訂本と同じでありながら、処方数がやや少ないことから、本書は重訂本の前段階のものと推定される。

通元の小引の中に次のような注目すべきことが記されている。①ある人が『古今方彙』を持参し、通元に考訂、添補を要請した。②通元は本書が自分の主義に合わなかったので、初めは断つたが、断りきれず引き受けた。③考訂は旧版にしたがい、僅かに修補を加える程度にした。④旧版は出典文献名に間違いが多くみられ、訂正したが、完全ではない。⑤通元は「先賢求本の治験、及び、諸書得効の方」を増補し、増補した処方の上には丸をつけた。

以上の小引を参考にすると、原『古今方彙』は甲賀通元が著したのではなく、通元はすでに出版されて

いた『古今方彙』を考訂・添補した人であることがわかる。重訂本も合わせ、通元は『古今方彙』を二度、改訂したことになる。

前述の⑤にしたがって刪補本と重訂本にみられる処方を整理すると、原『古今方彙』収載の処方数は一四八七方、刪補本では一八二〇方、重訂本では一八六四方となり、改訂ごとに収載処方が増加していく様子が判明した。

前述の④を参考に、各処方に記されている出典名を頼りに、それぞれの処方の条文に当てみると、④の記述通り、出典文献の間違いに気付く。たとえば、中風門、烏薬順気散は「局」とある通り、『和剂局方』の処方ではあるが、主治症の条文内容は『和剂局方』に一致せず、『万病回春』のそれに一致する。すなわち、直接の引用は『万病回春』であり、『和剂局方』ではない。通元が訂正できなかった箇所が少なからず存在する。

以上の問題点も考慮しながら、改めて原『古今方彙』収載処方の出典を再検討した。『万病回春』由来の処方

が六〇四例で最も多く（出典名では四八四）、全処方数が一五五九例の四割近くであった。各病門の中で、初めの方に『万病回春』由来の処方が集中していること、また、本書の病門全体の構成が『万病回春』に極めてよく似ていることから、原『古今方彙』は『万病回春』を基本にしたとみられる。『古今方彙』以前に、『万病回春』の処方を中心に編纂された医方書として『衆方規矩』（二六五八年）が存在する。したがって、『古今方彙』の成立には『衆方規矩』が何らかの影響を与えたと見ることができよう。ただし、両書の内容は近似しながらも、編纂の意図の違いがうかがわれた。『衆方規矩』は各病門の基本処方を選ぶという立前から、処方数は少なく、初版では一二〇方、増補されたものでも約七〇〇にとどまる。一方、『古今方彙』は有効な処方を蒐集するという立場から、一四八七〜一八六四方とその数が多い。